

『日葡辞書』

● 浅原義雄

はじめに

最近のキー・ワードの一つに異文化交流がある。異文化交流を英語で言えば、さしずめ“cross-cultural communication”であろうか。日本の歴史を通覧すれば、異文化交流の変遷と言っても過言でないかもしれない。異文化交流の最初の流れとして、奈良・平安時代の遣隋使・遣唐使による中国文化の摂取は、日本文学史上最古の漢詩集『懐風藻』で花開き、その後も中世の僧侶階級による五山文学や江戸時代の空前の漢文ブームまで継続された。

戦国時代から始まったポルトガル・スペイン等の南蛮文化と称されるヨーロッパ文化の受容は、江戸時代においてオランダ独占による長崎の出島を経由して続いていた。その流れは、幕末の黒船来航から現代にかけて欧米文化と名を変えて生き残っている。まさに日本の歴史は、外国文化の受容の歴史そのものでもある。それと平行して外国人の呼び名も、唐人、南蛮人、紅毛人、異人、外人、異邦人、ストレンジャー、エトランゼ等、時代に合わせて変化し実に様々であった。

そこで南蛮文化交流の象徴とも言うべき『日葡辞書』に焦点を合わせてみよう。『日葡辞書』は、1796年（寛政8年）に刊行された稲村三伯の『波留麻和解』や、1814年（文化11年）の本木庄左衛門等による『諳厄利亜興学小筌』等ほど世に喧伝されていないが、戦国時代から江戸初期にかけての日本語の状況を知るには貴重な資料と言えよう。

1. 南蛮文化

『日葡辞書』を生み出した南蛮文化とは何であろうか。南蛮という字は、中国語の東夷西戎北狄南蛮からきているが、今でも南蛮揚げや鴨南蛮にその字が残っている。その当時の外国人は厳密に言えば、ポルトガル人・スペイン人を南蛮人、オランダ人を紅毛人と呼んだほうがよいのかもしれない。

日本という国は、1295年(永仁3年)頃に出されたマルコポーロの『東方見聞録』において「黄金の國ジパング (Zipang)」と書かれたせいも、その存在は早くからヨーロッパ人に知られていたが、本格的な交流は戦国時代まで待たなければならない。ヨーロッパ人のアジア進出は、1498年にバスコ・ダ・ガマによる喜望峰経由のインド航路発見と航海術の進歩によるものであった。

ポルトガル、スペインとの交流は、1543年(天文12年)の種子島への鉄砲伝来と、6年後の1549年(天文18年)にイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier) の鹿児島来訪が大きな契機となる。

種子島にポルトガル船が漂着したとき、島の名主が乗組員の中国人と漢文で筆談したとのことだが、これも日本人の中国文化摂取の余徳であろう。三人のポルトガル人の中に百発百中の鉄砲の名人がいて鉄砲の威力を知らしめたために、領主種子島時堯が小銃2挺を買って、二丁の内の一丁を薩摩の島津義久に献上した結果、その後各地に鉄砲の製造が広がっていくのは周知の事実である。堺は火薬の原料である硝石の輸入港であったために、大いに賑わったようだ。信長は長篠の戦いで一斉射撃を行ったと言われているが、槍や刀での一対一の戦いでなく、鉄砲の殺傷力で戦法が違ってきたことは歴史が証明している。

鉄砲伝来が西洋文明技術の摂取とすれば、精神的なものとしてはキリスト教がはいってきたことであろう。キリスト教の伝来は、アンジロウという鹿児島の武士が誤って人を殺し、寺に隠れたが逃げ切れないと悟って知り合いのポルトガル船長を頼って日本を脱出したのが遠因となっ

ている。船長は彼をフランシスコ・ザビエルに預けたことから、ザビエルは日本が仏教国で回教が入っていないことを知り、二名のポルトガル人宣教師とともに元薩摩藩士アンジロウを連れて鹿児島に上陸した。その後、ザビエルは平戸・京都・堺・山口・大分と布教する。キリスト教は九州を中心に広まり、キリシタン大名の大友宗麟、有馬晴信、大村純忠等が、1582年（天正10年）にローマへ伊東マンショ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノの四人を使節として送るほどであった。天正遣欧使節団は、日本語を話すポルトガル人神父メスキッタが通訳に加わり、イエズス会巡察使バリニャニが率いられて天正十年に長崎を出港した。一行は二年半後にリスボンに上陸してポルトガルからスペインに入り、マドリッドでスペイン王とポルトガル王を兼ねるフェリペ二世に大名からの日本語の書状を渡した。そして半年後に目的地のローマに到着したのである。少年使節は、武士の正装で大小の刀を差してローマ法王グレゴリオ十三世に拝謁した。8年5ヶ月にも及ぶ長旅を終えた使節団が、帰国の際に西洋印刷機を持ち帰ったことで、『日葡辞書』が日の目を見たとも言える。

この印刷機で、『平家物語』『伊曾保物語』『和漢朗詠集』『拉丁文典』『日本文典』『日葡辞書』『どちりな・きりしたん』(Doctrina christão)等が出版された。『どちりな・きりしたん』とは聞き慣れない言葉だが、「どちりな」とは16世紀ポルトガル語の訛りで英語の“doctrine”にあたり、意味はキリスト教の教義書である。その内容は師と弟子の問答形式となっていて、教義が平易な文章で説かれている。『どちりな・きりしたん』は、1592年頃と1600年に刊行されてローマ字本と国字本がある。

『伊曾保物語』は、『イソップ物語』の翻訳で上巻20話、中巻40話、下巻34話の計94話からなり、最初の30話がイソップの逸話で、あとの64話が動物の寓話で構成されている。原本の『イソップ物語』は、1590年（天正18）スペインの宣教師バリニャーノによって日本にもたらされた。この本が日本に於ける最初の西洋文学の翻訳とも言える。『伊曾保物語』

には天草本と国字本があるが、誰でも簡単に入手しやすい岩波文庫の万治絵入本『伊曾保物語』で一例をあげてみると、

さる程に、春過ぎ、夏^な爛^たけ、秋も深くて、冬の比^こにもなりしかば、日のうら～なる時、蟻、穴より這い出で、餌食を干しなどす。蟬来て、蟻に申すは、「あな、いみじの蟻殿や。かゝる冬^たざれまで、さやうに豊に餌食を持たせ給ふものかな。我に少しの餌食を賜^たひ給へ」と申しければ、蟻、答へて云く、「御辺は、春秋の営みには、何事をか、し給ひけるぞ」といへば、蟻、答へて云く、「夏秋、身の営みとしては、梢にうたふばかりなり。その音曲に取乱し、隙なきまゝに暮し候」といへば、蟻申しけるは、「今とても、など、うたひ給はぬぞ。『謡^{うたい}長じては、終^{つい}に舞^{まい}』とこそ承^{うけたまわ}れ。いやしき餌食を求めて、何にかは、し給ふべき」とて、穴に入りぬ。

その如く、人の世にもある事も、我が力に及ばん程は、たしかに世の事をも営むべし。豊かなる時、つゞまやかにせざる人は、貧しうして後に悔ゆるなり。盛んなる時、学せざれば、老ひて後、悔ゆるものなり。酔のうち乱れぬれば、醒めて後、悔ゆるものなり。(注1)

平易な日本語で翻案されており読みやすく、『イソップ物語』と内容を照らし合わせてみるのも一興である。

2. 日本語に残ったポルトガル語

南蛮文化の中でも、ポルトガル語はポルトガル人が1543年(天文12年)に種子島漂着してから、1639年(寛永16年)に徳川幕府によって国外追放されるまで、百年近くの交流があったせい、日本文化の中になんかしぶとく生き残っている。主要なものをカタカナ、ポルトガル語、漢字の順で列挙してみると以下のごとくなる。

宗教関係

イルマン	irmão	入満（修道士）
キリシタン	Christão	切支丹（キリスト教徒）
クルス	cruz	九珠（十字架）
バテレン（ペアドレ）	padre	伴天連（神父）
ミサ	Missa	弥撒

食物関係

カステラ	pão de Castella	蒸卵糕
カルメラ	caramel	浮石糖
コンペイトウ	confeito	金平糖
ザボン	jamboa	朱欒
タバコ	tabaco	煙草
チンタ	vinho tinto	珍陀酒
テンプラ	tempero	天麩羅
パン	pão	麵麩
ボオロ	bolo	房露

衣服関係

カッパ	capa	合羽
サラサ	saraça	更紗
ジバン	gibão	襦袢
ビロオド	veludo	天鵞絨
ボタン	botão	釦
メリヤス	meias	莫大小
ラシャ	raxa	羅紗

その他

イギリス	Inglez	英吉利
オルガン	orgão	風琴
カピタン	capitão	甲比丹
カルタ	carta	歌留多
ギヤマン	diamante	金剛石
シャボン	sabão	石鹼
チャルメラ	charamela	喇叭
トタン	tutanage	亜鉛
バツテラ	bateira	端艇
ビイドロ	vidro	硝子
フラスコ	frasco	布羅須古

以上のごとく、人間が生きる上でもっとも大切な「衣・食」に関する語が数多く残っているのが面白い。「バツテラ」にいたっては、船の意味から関西では舟形の木枠に入れて作る押し寿司にまでに使われている。“ponto” (=point) が京都「先斗町」の地名にまで残っているのも、キリスト教の布教が関西を中心に行われた名残りであろうか。「ピンからキリまで」は、ピンがポルトガル語の“pinta” (点) とキリが“cruz” (十字架) から来ているとも言われているように、ポルトガル語の名残りはそれこそ枚挙にいとまがない。これとは対照的にスペイン語は、ポルトガル語・フランス語・イタリア語と同じラテン語系に属しているせいか、ポルトガル語ほどには日本に残らなかったのは交流の歴史が比較的短期間であったためであろうか。ちなみに上記にあげた「メリヤス」の語源が、スペイン語の“medias” か、ポルトガル語の“meias” のどちらが残ったのかいまだにはっきりしていない。

3. 『日葡辞書』

『日葡辞書』の原文は、Oxford Bodleian Library からマイクロフィルムを取り寄せて複製したものが勉強社から出版されているが、ここではもっと読みやすい岩波版『邦訳日葡辞書』の頁を開いてみよう。なぜ、「日葡」となるかという点、日本とポルトガル（葡萄牙）の頭文字をとっただけの話である。アメリカ（亜米利加）を米国、イギリス（英吉利）を英国、日本とロシア（露西亜）が戦ったから「日露戦争」と呼ぶのと同じように漢字をあてるとそうなる。

冒頭に“Oxford Bodleian Library”蔵本である「原本扉」の実物大の写真が載っていて、“VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM”（日本語辞書）の文字が大きく印刷されている。頁全体には、「イエズス会のパアレたち及びイルマンたちによって編纂され、ポルトガル語の説明を付したる 日本語辞書 教区司教ならびに上長たちの許可のもとに、日本イエズス会の長崎コレジオにおいて 1603年」（注2）と書かれている。日本語に残ったポルトガル語の箇所でも示したように、パアレはパアドル（神父）で、イルマンは修道士、コレジオは学院の意味である。この辞書が1603年に出版されているところに歴史的な意義があるといえよう。1603年（慶長8年）は、1600年（慶長5年）の関ヶ原の戦いで豊臣方に勝利した徳川家康が、征夷大將軍になって徳川幕府を開いた年でもある。1624年（寛永元年）にスペインとの国交を断絶して来航を禁止したのに始まって、1637年（寛永15年）の島原の乱を契機として1639年（寛永16年）にポルトガル船の入港が禁止されて鎖国体制が確立するのは、『日葡辞書』が出版された36年後である。

『日葡辞書』の解題に、この辞書が成立した過程が詳しく述べられている。前述の1549年（天文18年）にフランシスコ・ザビエルが来日して以来、30年間ほどの準備期間を経て1581年（天正9年）に府内コレジオで、1585年（天正13年）に有馬セミナリオで日葡辞書が作成された。1590年（天正18年）に帰国した天正遣欧使節団が持ち帰ったゲーテンベルグ

印刷機による西洋活版印刷技術の導入で、『日葡辞書』が完成したのである。この辞書をもとにして、スペイン語に翻訳されて1630年（寛永7年）に『日西辞書』が、1869年（明治2年）にフランス語に翻訳されて『日仏辞書』が出版されている。

採録語の総数は32,293語になり、その中には九州方言や近畿方言が収録されている。日本語がアルファベット順にポルトガル語式のローマ字で表記されているため、ポルトガル語では「H」は発音しないので、『日葡辞書』でも「G」の最後の語に

Giùzan. チュウザン（重山） →Chôzan

がきて、「H」の項目を抜かして、「I」の

I. イ（威） 壮麗で、威厳のあること。例、Cunxi vomocarazaru toqia, i-arazu. ¹⁾（君子重かざる時は、威あらず）賢人、知者は重々しくなれば、威力、権威がない。¶I no aru fito.（威のある人）権威、威厳のある人。¶I uo furû.（威を振ふ）威や豪華なさまなどを示す。
※1）天草版金句集、p.510.ただし、その原文中には toqia でなく、toqumba とある。

となっている。同様に、現代のポルトガル語辞書には外来語として「k」の項目があるが、日葡辞書には「k」の項目がないので、『日葡辞書』の「I」の最後の語は、

Iuzuya. ジュズヤ（珠数屋） コンタス（contas 数珠）を作る家、または、それを売る家。

となり、次は「M」で始まり、

MA. マ (魔) Tengü. (天狗) 悪魔.

とあって、「K」と「L」の項目は抜けている。語の分類もかなり精密で、方言・卑語・仏法語・文章語・詩歌語・幼児語・雅語等に仕分けされている。例えば、「カミ」の字を見てみると、

Cami. カミ (髪) ¶ Camiga tatçu. (髪が立つ) 髪の毛が逆立つ. ¶ Camiuo soru. (髪を剃る) ¶ 髪の毛を剃る. ¶ Camiga chigimu. (髪が縮む) 髪の毛がちぢれる. ¶ Camiuo nazzuru. (髪を撫づる) 頭に手を置いて撫でてかわいがる. ¶ Camino vochi. (髪の毛の落ち) 女の頭髪の抜け毛. ▶次条

† Cami. カミ (髪) ¶ Camiuo tatçuru. (髪を立つる) 髪の毛をすっかり剃り落としてしまってから、伸びるままにする. ¶ Camiuo vorosu. (髪を下ろす) 人が僧侶になる場合などに頭髪を剃る. ¶ Camiuo saguru. (髪を下ぐる) 婦人が、髪の毛をばらばらに解いたままで、えり首のあたりで一か所だけ結んでいる.

▶ (上・頭) ; Sabaqi, u ; Tare, ruru ; Toqifodoqi, qu ; Toqimidaxi, su.

Cami. カミ (上) 上部. ¶ また、主人、または、女主人. ▶次条

† Cami. カミ (上) ある所の頭 (かしら)、または、長. 例、Cami ichinin yori ximo banminni itaru made. (上一人より下万民に至るまで) 最高の身分の人から最下級の人に至るまで.

† Cami. カミ (上・頭) 頭. ¶ Camiga vtçu. (頭が打つ) 頭痛がする. ¶ Camiuo taruru. ¹⁾ (髪を垂るる) 一歳から三歳までの乳児の頭を剃る. ※1) 本来、Cami (髪) の条下にあるべきもの.

▶Camitare.

Cami. カミ (神) 日本のゼンチョ (gentios 異教徒) が尊崇する神

(Cami). ▶Arafitogami; Icusagami.

Cami. カミ (加味) 医者用語。ある材料を増したり減らしたりして薬を作ること、すなわち、薬の調剤。文章語。一般に通用している語は caguen (加減) である。

Cami. カミ (紙) 紙。例、Camiuo suqu. (紙を漉く) 紙を作る

Cami, u, ôda. カミ、ム、ウダ (噛み、む、うだ) 噛み砕く、または、噛みつく。¶Xira auauo camu. (白泡を噛む) 馬が口から泡を吹く。¶また、Cami, u. (噛み、む) 食う。¶Xixi fitouo camu. ¹⁾ (獅子人を噛む) 獅子が人を食う。※1) 獅子人ヲ噛ムニ牙ヲ露ワサズ (天草版金句集、p.546)

Cami, u, oda. カミ、ム、ウダ (噛み、む、うだ) 例、Fanauo camu. (涙を噛む) 鼻汁を拭き取る。▶Tebana.

の如く、事細かに記述されている。次の言葉も、当時の日本の社会状況を知る上で大変に興味深い。

Baccun. バックン (抜群) 副詞。非常に、一段と、または、すぐれて。例、Toxino fodoyorimo baccun votonaxûmiyuru. (年の程よりも抜群大人しう見ゆる) 実際の年の程にまさった思慮分別と知識とをもっているように見える。

Coi. コイ (恋) 愛情、または、よこしまな慕情¹⁾ ¶Coiuo suru. (恋をする) 愛情、または、みだらな慕情を抱く。※2) 原文は saudades ruins. このように '恋' に対して 'よこしまな、肉欲的な' 愛情に限定した注は、次条にも、別条 Renbo (恋慕) などにも見られ、羅葡日にもその例がある (Mimographus; Mimus). これは、清らかな愛、神の愛に対して、人間の男女間の愛を肉欲的なみだらなものとするキリシタンの宗教的な立場からの説明と見られる。これに対して '愛' 一般を表すには、別条にある Taixet (大

切)を用いたのであって、羅葡日も同じである (Amor; Pietas).

Gijiqij. デジキイ (地敷居) 座敷 (Zaxiquis) の柱と柱の間を、畳 (Tatamis) に沿って横に渡してある木材. 下 (X.) の語. 上 (Cami) では、Yoxejiqij (寄敷居) と言う. [下 (X.) は九州、上 (Cami) は近畿を表す]

Vani. ワニ (鱷) この名で呼ばれる、人間を食うという魚.

Yudôfu. ユダッフ (湯豆腐) 薄い豆腐 (Tôfu) で作り、ある種の掛け汁を添えた食物.

以上は『日葡辞書』のほんの一例だが、室町時代末期から安土桃山時代、江戸初期の時代にかけての日本語の発音、語彙や生活風俗などを知る上で貴重な資料となっている。授業の空き時間に図書館に行って、コミュニケーション学科の皆さんに『日葡辞書』を借り出して一読して欲しい。

注1 万治絵入本『伊曾保物語』、岩波文庫、2000年、129頁～31頁

注2 『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980年、1頁

[参考文献]

角川第二版『外来語辞典』、あらかわ そうべえ著、角川書店、1981年

『増補外来語辞典』、榎垣 実編、東京堂出版、昭和62年

『外来語とは何か』、田中建彦著、鳥影社、2002年

『日葡辞書』解題 亀井 孝、勉誠社、1973年